八宗起原釋迦實錄

へ13
4036
3

八宗起原釋迦實録巻之三

東都　鈴亭谷峩譯述

昭和42年12月12日
和田大作氏寄贈

十五　悉多太子三妃を迎納ゆゑ并眞宗ゑ妻を帝る據

光陰ハ百代の過客ふて。過行ものの最速くも。星霜後て悉多太子ハ。十五歳ゑ成らせなひ。浄飯王ハ諸侯を徴て。當年二月八日立太子の儀式を行ふべしと勅しゆへ。百官百官心得て。宣旨を諸国へ接行せ。位官伯長の司。百服王。百道無為の司。解脱王。聖道文武の司。甘露服王を南。諸国の小王我もくと。迦毘羅城ゑ參着して。殿上殿下ゑ羅列さう。彩て浄飯聖王ハ。大殿ゑ出御ありて。白玉盤ゑ懸へ。る。四海ゑ。もて衣冠正しく。坐ゑ着ゆひし悉多太子のゆん頂ゑ灌さ

00 42 8645

門 へ13
號 4036
卷 3

なひ天地を拜しあひつゝ今日恵多をもて世嗣とを因て天地と共に諸国の王乃至五百の翁種群臣に是を告るのゝち と清聲うゝく唱へなへば太子ハ王坐を起なひて天地父王を拜謝しなん。當下雲の如く星の如く。廣上下に列の諸官奇一慶賀を述て聘物を捧ぐるにぞ王のたん歡喜斜ならむ。列位官爵を加へらきて。大宴を開き饗應なひ賜て眠て なりし寔に茅屋慶例あり。遠て后恵多太子ハ春宮に立なゝ より。諸人の尊敬嚮ふも偏して。序盛勢弥高くも。數多の宮女們冊きまいらし。糸竹管絃の遊を尽して晝夜を慰め奉まども。たゝハ却て喜しく。懶きとに思ひなひ。齋古の書をのゝ。友ぐきに結びなひ。其理を究めなんと思ひなひの間道を問へば紀良師の亀きを。常に憂ひなひつゝ深氣なる

風情ハ更に無く。只苟のたん諸に。後世の嘗殺せの戒をのゝ 宣ひて。色静に在しませば。朝てゝ竟に疾病をやせじなんと 憔悴跡夫人ハ。浄飯王に縋の由を。情々地に奏しなんぞ。王も 辱慮を悩ましなひ。原来速くも出塵の志を。却しまたりの欲 に。ふも右にも厭離の心を失ハさじなと思ひより。憔悴弥高 将軍に。も其旨を命じなひて。猶容色と百般の技藝に勝 まし美女を集めて。太子の左右に侍らつゝ。春の花冬の雪 時折々の景に随ひ景色絶地の名勝。遊覧を促して。女色 歡樂の奥に。も出家させじと計ひなつゝ。凡人あくぬ太子に 在せば數多の美女を見なへども。色情を動かしなんぞ遊歡に 眼ハ慰めなへど。色妻の樂しみとハ為なんぞ自欲しなんに春の 日の長にも倦ぬ。冬の夜の寒きも厭ぬ。讀書に明し暮し

ゆひつ序齡既ふ二八も就て十七ふ成ゆひしゝハ弥其至孝
德義世ふ聚まゆふ就ても若出塵も志ゆゑ聖王の種と謂
世人の望を先ふべしと釋尼誠して男ハ有を淨飯王ふ告奉
アて速くゆゑ子のもん后妃を迎へゆゑ自然愛憐をせしゝ
ゆひ出家學道とも止まゆひて寶位ふ即せゆハべしと衆位
美聞しふけまゝハ大王實ゆを思しゆひて然ゝハ滿国の王ふ傳
て新宮ふ備べ才色両全の玉女もゆゝハ迎納べしと勅旋
わり百回百宮奉りてゆゑ天下最一の美人を撰ま奉らゆを
と逸ふ心を尽しつ多く都城へ尼寄まゝども常ふゆゑ子ふ冊
まゝる數千人の侍女仏中へ雜て獨際立べゆ美人ハまゝ得
ざりしゝハ王亦左右の梵志ふ命じて書ふ好ゆを相ゆて人名を知ゆ
大王とゆり是迦習の侍るり石婆羅と普く諸国を求めゆゝふ迦夷衛国ふ一個の
人の名あゆゝ

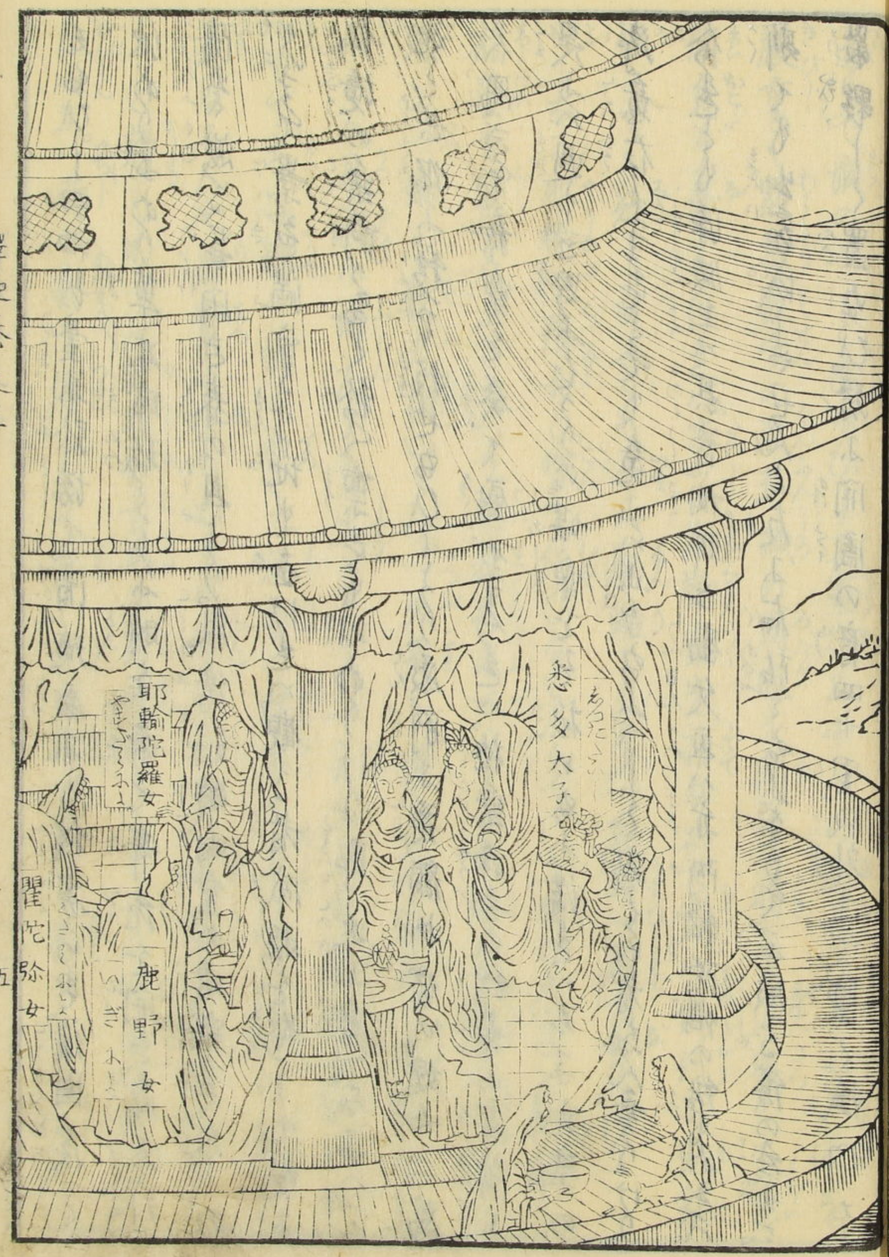
美女ゆり執杖釋種の女ふして其名を瞿陀弥女と或ハ倶夷と喚微しつ
淨きて蓮華の似く美の技藝ふ長ゝまゝハ諸国の王と仏子のうゆふ
娶らまく欲ゆまゝども倶陀跡女教て肯ハまゝ竊ふゆゑ子の稟性美
の技ふ長ゆひしゝを傳へ聞て慕ハしく孤想ひを惱まゝて折
しも彫と刻しねど梵志仏ゆ美女の由を聞知りて淨飯王ふ
美しゝ志うべ淨飯王睿感わりて新宮ふ迎へゆふゆを倶陀弥女
深く恨びつゆゑ子の新宮と崇めらまて跡意なく冊き奉ゆゝれ
茲ふ釋種の一族ふ婆羅門摩訶那摩といふ大臣ゆり耶輸陀
羅女と号微しゝ志一個の女有けるゆ（一書ふ耶輸陀羅を迦夷衛国王の女とゆりハ引るり迦夷衛国より出しものハおもふ）容顔寔ふ
端正しくも盍月閉花の面ゆげ
ゆり加以聰明英智賢才衆ふ超ゝまゝハ父母深く寵ゝて女の
志ふ貴族ハ更ゆり容貌才智美事の技術衆くの首上ゝる

人を捨てて夫ふ做さんやと思つへ深窓ふ養ひて掌珠抜ふと愛る程ふ世間ふ聞ふ達しけまへ這回太子の新宮を求めふ拘をもて共ふ入内をくれ育勅命を蒙りて父母ハさらるあり耶輸陀羅女も嫉と限りもなく寔や太子ハ一切の技藝妙ふ勝まをひつ智能秀をひしの三ふ御容の美麗と二十二相八十種好悉く具ふをひ聖徳備をふる正しく特輪王種の太子ふ最愛くも聘さるる数あるぬ分の幸深ハ怠生なる宿世の善報ふやと親子欣喜勇こつ耶輸陀羅女ら七宝の瓔珞ふ身を莊厳五百の婇女を相随へて太子の宮へ昇りけまへ浄飯聖王勅をひて茅事特輪王の例ふ准へ婚姻の儀式美々しくも亀鶴の縁を結ませをひぬ抑太子と耶輸陀羅女ハ前世の宿因在しふて二世のちん縁深うぬふや

大普權經云、何故菩薩而有妻妾菩薩無欲所以示現妻息防人嫌疑菩薩非男斯黄門故納妃云

浄飯ひ睦まつくも共ふ相娛をふ斯てハ幾ばく出塵も自然新ちんと浄飯王ハ稟ともさるる情墨弥夫人もちん身を甫て安じをひ引まへ爲將軍爲陀夷を初満朝の月卿雲客氏間紫しの末までも皆萬歳を唱へけり當時ふ釋長者の女ふ鹿野女と異做を佳人あり是をも太子の新宮ふ迎納をひしくハ瞿陀弥を第一の妃と耶輸陀羅を第二の妃と鹿野女を第三の妃とし給ふ一書ふ鹿野女の父を摩訶那摩国王と云ふハ非く摩訶那摩ハ前ふ云ふ耶輸陀羅女の父ふして婆羅門の大臣なり西域中ふ广訶那广云ふ国ふ也夢經ふ太子有三妃瞿夷即是第一妃也第二妃名耶輸第三妃鹿野其父名釋長者云云とあり俗説の誤なり推て知るべし浄飯王ハ猶も富貴歓楽の為ふ太子の發心を止んと思召ふふよりて三時殿を造りぬひて春の宮と做しぬふ則ち三宇の玉殿ふて暖殿を涼殿を中殿と号け一年の旅ぬをしも一年三時のこと首巻ふ載さる運所ふ尽くさるる美麗廣大却ふ背羊造立

太子
三時殿ホ
三新宮と
娯樂


耶輸陀羅女
悉多太子
鹿野女
瞿陀弥女

志ゆひし。四神の臺ふ弥勝て。清瀧殿ふも稍劣らぬ。後園廣く
池あり山あり草木威珍くうふ時を爭て奇花を開き。霞天引
陽光燃ゆる。長閑き春の且より。風傍引時雨空の凄寂き冬の
夕まで。景色満ざる寸地も無けれバ。觀る者威服を驚して現ふ
但境の樂所ゆるく稔く稟ぬも以ありけり即這王殿ハ左子ハ二
妃と共住ふ移り住せゆひしより。殿別ふ美顔柳姿の嫁女二萬
人冊きて。奏樂を奏て慰めまるをバ。極樂淨土の歡舞の喜藩も
是ふハ過じと思ふだうの。娯樂をそ極めゆふ。浩をバ左子出塵の
沛意在しまもとても。竟ふハ止りゆふべしと思ふる者ふん無うけり。
今まとも淨飯王ハ其昔。相師が勸文且ハ示。阿私陀仙の結もあるバ。
斯ても出家成しやせんと。左子ふ右陪ゆふをもて。三殿ふ獲の兵士を
嚴警しく置ゆひ。殊ふ用圖の音四十里の外まで響く鐵門を
造りて。城の四門と成ゆひしふ。晝夜三千人の衛士めりて出入者を
嚴重く點檢。數千の監率城の周匝を。間ゆく時ゆく巡察して。敬云
備怠り無うけきバ。左子ふ尚歡樂を捨ゆて。發心修行ふ出家
做さまく欲しゆふとも。今ハ厭離しゆふべ死路一筋も無うけり
世ふ左子耶輸陀羅女と。婚を結びぬちんとて。バケ國の左子を相敵ふ
諸藝を競べゆふといふ。這說甚不可ゆふん。緯を畢ハ必怨ゆ
殊ふ一婦を數夫相いどみ。一夫是を得と。ハ自陰の夫熟をも
恨まん。且渴ハ婦人より。生ぢ。ぶ言ゆふを。怨親平等の佛
心ゆて。左子郎一婦の與ふ。諸藝の勝劣を爭ひゆひ。他の怨を
惹ゆらんや。若實ふ今もゆふバ。佛も初めハ色慾ふ蠱惑せらを
しと謗もゆふん欲。非如古典ふ這說ゆふとも。ハ似而非僧の
凡心ふ。一時の説を傳しふて。冥く取も捨べ死のゆ書を惹く伝ぐれば。

書無記ふ如きと古人もいひけん。魯波瞿陀羅ハ過去ふ雪山下の
猪獸なりし。因緣ふよりて猪臺子を嫌ひ。吉子の妃と成し由あり。
是等の況と混じ志りの欲瞿夷の因位ハ繁文しるべ本編ふハ
省略す。猪奈吉子美婦人の三妃を迎へ。くども。枕席を優ふ志
ねたぶと梵書より說傳えまども。是恐らくハ淫屠氏の私意ふて。
尊たわが佛を穢させじと。專ハ作り備しるん夫人道の交を。
邪くざる則ハ夫婦親子の愛着をも邪るべうもと。遠てハ吉子の
愛ふも輒ふ似うるべうん自其愛着の深きを知りて是と捨
輪圓を離ぜハ成道して。一切衆生ゞ五濁六慾の惑ハ覺し難うる
べし。這理を以推ると。三妃ともふ国の快樂を行ひしふ究め
うる猪しも耶輸陀羅女ふ種を宿して。羅睺羅ハ生まれひしある
べし。本邪 圓融院のおん時ふ大裏の一官女が

有漏路より無漏路ふ通ふ釋迦ぞふも羅睺羅が母ハありとて離け
と孫し欲ゆ。今ハ今一向宗ふ肉食妻帯と做さハ。今く這理ふ拠るあり
とハ言世尊佛道以前の猪行所を修沼の身ふ学ぶハ相應しかるら
ねども。開祖親鸞上人の卓量より遠漢の人情を賣しなひ。
若凡僧奏僧ありて。邪淫を行ふものハ其身孤破戒の罪
を釀さるのミふ非ずして。宗門を汚辱むべし。陸ふ堅戒做さん
より。寧人道を恕さふ如しと。自ら恕して身神佛ゞの猪を
ひ。ためひしうる谷川の水流まを傳へて宗風泳溯んなり。実も
養い殺勝ある戒行いまと知ると見ゆるも。裏ふハ濁心貪慾を。
慾ふ行よりの。竟ふ其罪邪まて寺を汚し宗を辱しむ有如邪
行ゆうんより。真宗の教化とて奨ふ洩白しといとめ

十六 淨居天再三大子を誡と并太子無常を觀じ給ふ

却説悉多太子ハ三時殿に二妃を寵愛しなふて娯楽をきハめ給へど左に右に如幻泡影の世と教果なくて思を安す。従輪王の尊位に在て富貴歓楽に飽きりとも、涯ある命幾許ぞや。借使百年の間を経るも猶流水の去がごとく、倏然と滅ること電光石火よりも速なる、露の玉の緒引も留めぬ、教果なき儚ハ世の行径と厭離の御心兆なからバ娯楽極めなきぬことなれバ御身なるとども御心より娯楽とハ思しなきれど、宛にも角にも浮世の中を遁まほしく歎じ給ふ。御動静を見くなくへバ二妃を甫め烏陀夷其宅の扈従婇女に迨るまで覚束なく思ひつゝ、憍曇弥夫人に其体を悄々地に耶と告まゐらせけれバ夫人ハ王に奏しなひし、佃にかん胸を悩ましなひつゝ太子を女色に愛着せさせて因幕養書に氣を結ぼゞバ自然楽慾厭離の念をも兆さるべし、外遊させて其貴と慰めよとて勅しなふを奉りて烏将軍ハ藍毘尼苑に渡御しなふて御遊を催しなふべしとて太子を擁護まゐらすなど。天性至孝の太子に在せバ御父君姨母夫人の命に背き奉らじと敬で諾ひなくへバ大家大ひに悦て園を掃ひ塵を除め専ら努ると從を殺に迫る兒童们太子に供奉して鑾輿を東门より出しつゝ行列最も善美に藍毘尼園へ徐行揃しも天上の浄居佛識ハ浄飯天といふハ太子娯楽に愛着して本願を忘やせんと疑ふ故に神通もて老弊し人と化し行路を彳見するさ貴殿男女の中に雜て太子の鑾輿の近づくと見ぬ故意起て腰をし伸せバ警固の武士ハ驚て下なくと制すれども聾てか知らさ貌ふ躯て歩行ぬんと為なるぞ。剣使ハ大く怒てつゝ、這老奴無礼なりと息巻猛く突遣まぞ、二三足彷徨てせ嘆と呼つ仆きし

徑ふ若起も得ざりけり。太子は浩る為体を響輿の狸よう裔
ハ〜〜。奈何様しも者ありとも。老を勤らざるてやあるこ急ふ方右
の従者ふ命ずて。実作さまし老人を扶起させぬくども。力衰へ憔
悴てその身の五體を自由ふも。減羅ぬる形容を太子熟視しつ。
老てハ竟ふ皮冒裏へ。血肉枯て朝のごとし。人生し其日より。
年月一霎時も停らねば。幼うしも六歳以上忽地ふ弱冠くり二十歳
壮士さり三十歳強四十歳艾五十歳耆六十歳老七十歳老八十歳ふ逮ふもその年
月の移ること。電光の走るごとし。嚔くる輪廻の世を。
厭ざるハ愚なりと。頻ふ感慨しぬひて。浄遊の浄意発ぬくば。
微ふ心地例なること。輿還せと賞ふおそ迎習鳥陀夷驚きて。
鬼も角も蓋毘尼園まで。波浮流しぬくと雖むまども。敢て
冠引ぬさねば已度を得ざ平途より三時殿へ還浮しまつりぬ。

憍曇弥夫人ハ遠由を聞しつて憂ぬひ。徒てハ阿私陀仙人の言つる如く
ふ成ぬさん欲と安きふも在しまさど。王ふ密奏しぬくば浮阪王ハ
亦更ふ宸襟を悩ましぬひ。信遊楽の具を搭て厭離の念を
止めんと百般ふ計ひぬひ。新ふ百工を集合して。山水の奇観
描ける如き。萬花園を造ひ。嘗て太子の遊覧を促しぬひぬ
太子ハ承て欲しぬさねど。父大王の朝まで。ふ齋慮を尽させ
ぬひしを。園籬まんくハ慢しく。有〜〜頑愛ぬつハ。鳥将軍
ふ得つ。遠園ハ嚴く令して。波浮の粋見を園禁し。浄来を
留けをハ。道路閑ふ塵をも立ず。翔るもハ樹間ふ交集て。諸
聲妙ふ囀ずつ。波浮の奇楽を助くが如し。躺て太子の寶
聲ふ。近侍女官仏供奉して。南門より出しまつりし。心静ふ
除汙浄ふ。浄居天亦病児と化して。肉枯骨露をさら。赤色寒ふ

輦輿を停めて太子老人を勸りあふ

烏陀夷

淨居天化身老人

悉多太子

黄瘦つ。瘦臞し為体ありて。道路に倒るゝ所ゝを。繁国の武士
頻き新王。王命厳しく仕来を留めて。清道急り垂りしに。
浩る者の即ちるハ。不測々々と罵りつゝ。退退んと落ぐ折しも。
寶輦聳く迫つ乞ゝを。繁国の武士們を制さして。左ゝ倩爾
さるに。既に死向形相ありるあるを。大く怖ゝぬひつゝ。渠も是原来
壮健ありしぬに在ざりけんと。思に嚬慈に歌り。濫事飯食の度
ありて故に自然五臓肝心脾肺腎腑ハ。氣力衰へ疾病を遺して。
竟に死亡に至らん。嗚呼江湖上の一切衆生。貴きも賤しきも。
咸這大難ありあるゝ。嗜慾に歌り逸樂に荒ゝ。他と辛貪るやと。
深くも怕憂ひぬゝば。萬花園遊覧の。御意も乎失ぬゝど。
曩に王も途より還りしに。今亦這処より還らんに。又大王の
脣慮に背く。不孝の罪を何為ハせんと。思ひ回さぬひて。

急に典茱頭を徴ぬひ。件の病者に茱を施し。躯て萬花園
に波御しぬゝば。嚬より這処に侯奉ず。爲将軍大ひに
喜び。寶輦を迎まりて。弦楽吹弾りゝば更るり。種々の饗
應に。左ゝを慰め奉ゝども。左ゝハ美婦珍味にも。心楽
しみぬゝ。廣落花に垂常を観て流るゝ光泉に光陰の。
速きを惜ませぬゝ。日も稍西に傾きられば。寮馬に
きて萬花園の西門より還御しぬゝ。茲に亦浄居天ゝ。
既に老人病者と化して。左ゝの心を試ゝ。猶も又死相を
示して。道心を厲をべしと。思へど繁衛の外吏們に刑きんを
慮て。這回ハ諸人の眼に見せぬ。左ゝと爲陀夷に見せ
ぬやと。瘦し肌膚悉く。土色に変じる。死顰と化て遁路に
伏ども。供奉の諸人紛ゝざりけり。左ゝハ忽地這処に倩るを

猛めゆひ。速く侍し。烏陀夷を召て。烏陀夷よ那死人を見
ぎや。三寸息新て神去きぬ。四大（地水火風）散て五躰（頭と四肢）空き。
顔と成ぬるハ朝のごとし。世の人上ハ王侯より。下庶人ふ至る
まで。遠死を脱るゝ者ハなく。百年經難き仮の世を。或ハ色と
飲食ふ。身の行ひを慎まず。或ハ慾を恣ふして。金銭を貪
まどゝも。蚤常の風ふ誘引て。咸是他の有とし。も瞬間ふある
を暁得らぎ。浩る濁世を厭ふ。凡心こそ滅まし。けきと
命寛ふ瑠あまバ。烏陀夷も實ふ然ひと。答まゝど忌ち
く。浄馬の鑣を曳廻らして忙ぐはしく。還浄を促しまいくせ
けり。続て右ふハ老病死の。三相を見ぬひしより。猶蚤常を
觀じぬひ。益發心の浄志止難くて在しける。浄飯王ハ這由を
聞し召て逆鱗まし〳〵。右ふ浩る度を見せしハ。外吏共の

怠りありとて。其罪を糺させぬふふ。咸是浄居天の化身ふまゝバ。
老人病者ハ何国の者ぞ。其源流ぞふ知るりのあく。況て死骸ハ供奉
の者さく見認しとも有ざるふぞ。外吏共恐慎。裏ふを陳に
けきバ。恐らくハ是天魔波旬の障碍ある歟と。浄飯王も。仏地
惑ひぬひつゝ。弥右ふ富貴を厭ひて。出家の望止ぐまぢハ甘蔗王
より連綿ふる。新種の血脈絶ふんと。頻ふ胸慮を悩し
ぬひぬ

十七

比丘蚤上菩提の道を説并揚枝鐵鉢の事

分る程ふ悪多右ふハ。浄居天の神通ふて。老病死の三苦を見
ぬひ。弥蚤常迅速を觀じぬひし。其後ハ。三新宮（瞿陀弥耶輸陀羅鹿野）心を
鴛して。冊き奉るゝ。陳ふ〳〵ねど。浄飯も拂ふ。ありけきバ。三妃ハ
飽ぬ。地して。色香深くも。濁うまを。右ふハ教て顧りぬ。

菩提くハ梵語ふて道の極る者称して菩提といつり天ハ。ふて智慧とまゝ。ぶも本編ふハ多く法の道の意ふ用ゆ

只蓊々として在せしが一日烏將軍を召ひ。尤久しく宮ふ籠て。稍氣蓊を生じ。こまゝ野外ふ出て遊ま欲しと命を烏將軍奉ハりて。南を王ふ奏聞し。勅許を奉て眺望ふ。絶景の地ふ行宮を修理ひ。遠國ハ猶亦仕來を嚴しく留めしのこるゝ。比方五十里の外ふ數万人の。禁兵を置て警固を命じ。准備遺るゝ。こも無く。新宮も富麗ふて。尤子の富輝ふ隨ひ。ひ。媒女近侍前後ふ侍奉して。北門より出ひ。船て新ふ造りさる。行宮ふ迫りぬ。酒壺を傳し。妓樂を奏して。尤子と歡奉まゝ。遠樂を好ゝ。ねたねバ暫時ありて烏陀夷仙の。居庭十名ハ右を從ひ。野面の那方此方と逍遥ひ。年舊さる閻浮樹の蔭し。下蔭閑なるを。尤子ハ樂前そと烏陀夷仙を顧ひ。汝達一霎時遠処ふ候。尤那処ふて風景を觀ハんと

賞ひつゝ。一個邪く伴の木蔭ふ。結跏趺坐して。心ふ寂靜を求めゝ。

閑ふいふ。寂靜とハ。素を棄て。身も心も寂靜なることなり。其寂靜ふ心と身の二種あり。滑流ふして。貪慾なるも身寂靜の形ちなるまゝども。是心寂靜ならぎ。尤君父ふ仕奉て。浮世の中ふ交るとも。行ふ所法ふ合ハゞ。則心寂靜ふ。ども。身寂靜なること。身心ともふ寂靜なるハ。佛といひ。聖人といひ。亦世ふハ神明といふ。身心ともふ寂靜ならざるハ。是凡人なり。今まこバ身心靜ふして。忽流と悟心の。せざることを覺ゆ。こと。

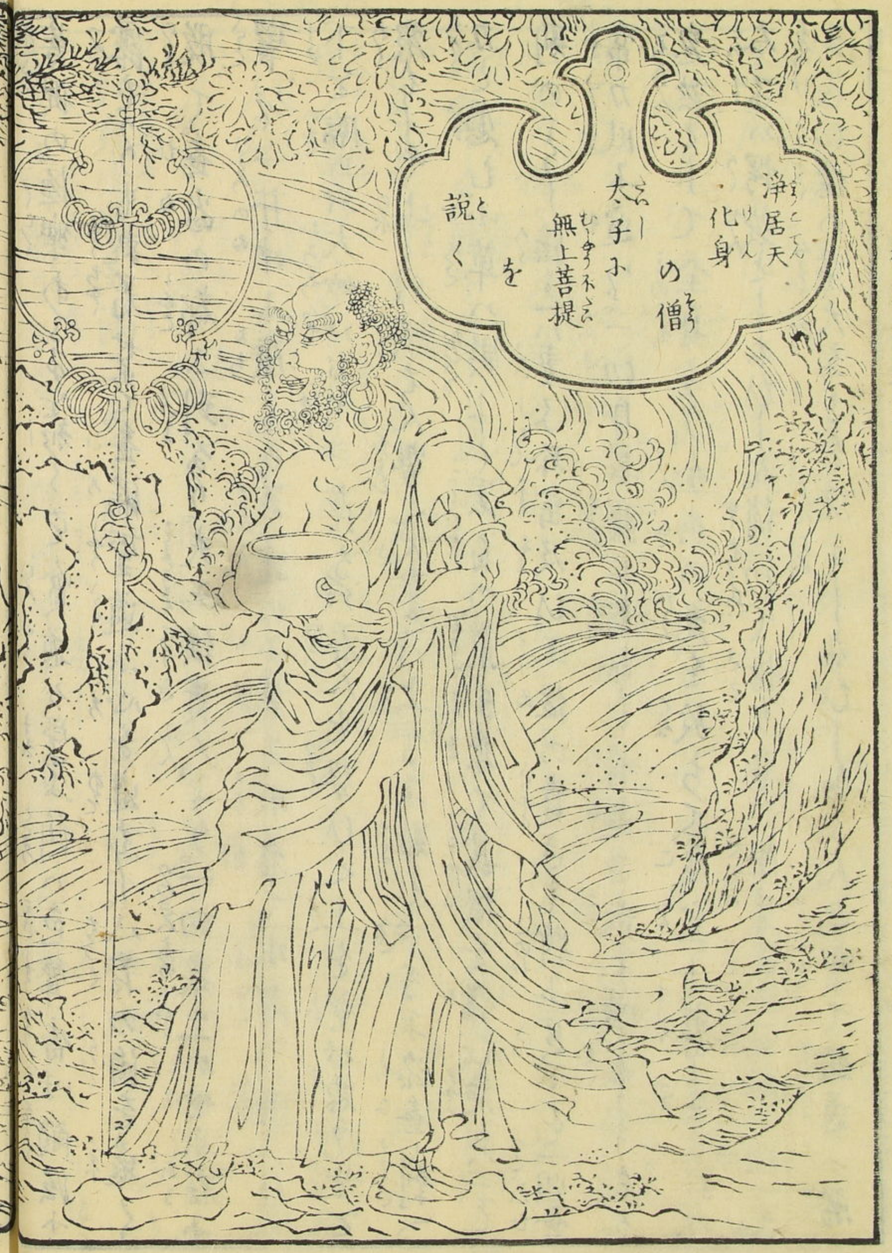
當下淨居天亦化して僧と成。法衣を着し。右手ふ錫杖を。柴燒し。尤子の辺ふ。我こ来まどり。烏陀夷

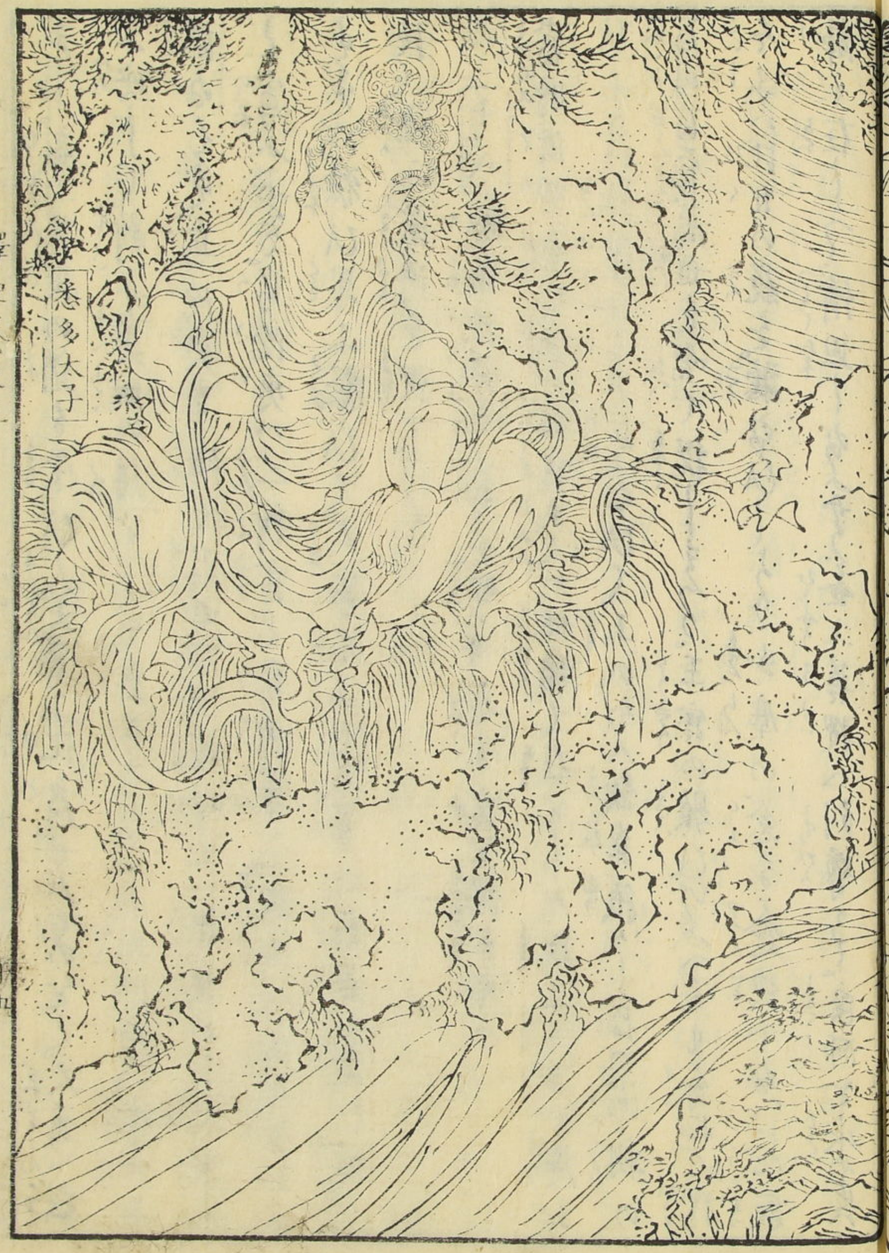
比丘者僧之梵語也此名乞士亦云除饉

釈氏要覽曰佛聽用二種有瓦鉢有鐵鉢

仏ハ見ゝざりしを左子蚤く見めひて。汝ハ何者そと問ゝた。
淨居天の僧イて。貪道ハ是比丘ゝと答まうるを聞ゝひ。比丘ゝハ
亦何とかいまゝ左子再問ゝべ。淨居天の僧形ちを端し嘆しつゝ
稟まをう。父子夫婦の愛着を断。輪回を離きて清淨ふ。命活を
比丘と称へぬ本来蚤一物唯一身ふ。含る湯杖ハ修道の具ふて。
搖動して驚を覚し。且亦他の菩提心を。誘引人為ふ聲を他を。
法まとも开を動うまとて。再び三ふ過べゝ。若問ふ人蚤と死ハ。
須く去べ死のゝ。備亦遠一漢淨ハ食を受るの應器あり。是三根
の人身を資し。急ふ要まうる物ふしして。遠它一物ゆうと蚤ゆと可
聞ゆゝ。行故ふ愛着を捨。輪廻を断やと思し召まん。江湖上の
一切衆生皆五濁ふ身を活し。六慾ふ心を惑ハ。老病死の迅速
あるを。目前ふ知ゝ。猶迷て生死流轉の苦界ふ漂ひて蚤上

菩提の。極楽あるを知ゝを。貪道ゝ学ぶ所ハ。色聲香味觸法ふ
露ばうも執着せぬ。蚤漏聖道ふ心を遊ぶ。八苦の海を渡く
脱て。蚤岩の都ふ到るゝ。夫王侯貴人より。一切衆生の世ふ在ふ
譬ハゝ。一井中ふ墮しゝ。半途の小草ふ取着て。水底ハ陰ゝ。
下を臨めば大蛇口を開き落ん。上を望ば悪虎牙を
聚ん。上ゝ喫ん。蚤ハ上るふ難く下るふ落蚤。剣ハ
力と憑む。小草ハ脆しく黒白の鼠出来て其根を噛む。危ゝ
期のごとし。落ハ妻子珍宝及ひ王位の貴きも特ふ見ゝ。一回蚤
常刀風ふ遭ゝ。一切身ふ隨ふ着あし。憑危き哉と嘆息し。
忽然として全身より。金色の光を放ちて。虚空ふ勝て去られば。
左子ハ愕然としぬひしゝ。猶初て悟りぬひ。原来天人比丘と化して。
出家切德の廣大あるを。説示しぬひしゝ。九誓て菩道ふ勝


浄居天
化身
の僧
太子ホ
無上菩提
を
説く


悉多太子

を。金剛菩提の道を学び。人天をも不化度せんものと。大道心を
不決して。新月真如の月をしも見ぬ。こゝを思しめし歎き給ふ
慮ぬを。烏陀夷を迎へ召ぬひて。汝今日は基樂めり。ん遊ん
と宣へば。烏陀夷は二の新宮と。将軍ふ。還御の由を告知ら
せ奉ひ。早ふ整ひて。大家方子の宮輦の。前後を圍ひ繞し
法ふ。涂ふ還御を祝しけり

十八

耶輸陀羅女三夢を警る并方子宮を潛出ぬる

當時波羅奈国の城の好宮夫人は。妊娠て在せしが。既ふ王子を産王
ひしうは難陀を子と号ぬひて。王のお人歓喜懺々ねば。満朝の
百官百官萬世を唱て祝しまつり。王宮の服ひいとべらも有ねど。猶
方子は比丘の説を聽ぬひしより出塵の念を愈深しぬ。心緒
静く在して。倩思しぬ。垂上菩提へ引導る。良師を求めぬ。

流道し難し。傳へ聞ふ。国天門ふ興の當て。行程一千三百里を隔ち
る。檀特山の法顔より。積雪彌楼宝山の連嶺ふ。覆心報謝賢道
垂岩を。修する神仙在せりと。亦阿闍郭妙見臺。優鉢羅山の
霍山ふ。明道秘支明姑験者の。行ひ清する處と。亦行程多く
山路ふして。嶮岨絶壁。或は赤。急流の大河ありて。往来征客も
稀ふ。多くは人跡絶しと聞ぬ。況多ふ。こゝで翼は垂られど。
海上数萬里隔てしあるねば。鳥ふ難き路ありとも。その路
ざる地あるんや。如何して宮中を潛出て。彼処ふ飛きこの年
月の宿意とも。果さんものと思せども。浄飯王の法令厳しく。
外遊しぬふも。数多の宮人前後を圍繞しまつる。夜は四門
の守衛固くて。身孤り潛び出ぬ。便宜垂られば。所意を遂々地
ふ苦しめぬひしを。今茲は既ふ所年も。十九歳ふ成るせぬひし。

左子ハ頻ニ焦燥ありて。只徒ニ年月を。送りて。生涯を過ぎまさば。老て悔とも其甲斐あらじ。よしや城門固くとも。迫習嫌女二妃ハ。懇睦しつる間あらば。先宮中を潛出人其它ハ撿ニ臨ずして。年せん郷も有あらめと。深念を決めゆひしをよも斯まで。二新宮も思ひ設けで在らる程ニ。頃しも春の朝霞し。樹毎ニ花の嬌向と。色香爭ふ二月ハ。夜毎も殊ニ長閑くて。朧景色ニ微吹風も七日の羊斤月を。耶輸陀羅女ハ欄より。庭面眺ニ望る折しも。不測あら哉照らる月忽然と地ニ墮ちまさば。是ハと大く驚く却倉ニ。其身の牙歯偖羅哩と脱て。其の邊ニ落てンげり。荐驚く耶輸陀羅女ハ。其歯を拾ひんと為ありふ。孰の程ニ右の膝ニ。其身ニ有ると。垂けまさば弥益驚ひて。已身を顧みひて是ハ滅猿ハ甚麼しして。不奥の體ニ滅けんかと。懇く欲く其聲ニ。愕然として驚き覚まさば。是已房ニ寸眠し。仮寐の夢ありて。日ハまだ高く覚ても。専自安らかぬ。耶輸陀羅女ハ思ふ。ニ。勤ニ急り真眠し。其侍の罪ふり忘れ。大凶夢を見しの欲。將左子のあんじ。賞東ありて事のやと。思くば心急ぐまつも。激湯をして身を清め。荘厳て左子の在を。王殿へ来て窺ふ。左子ハ静ニ書を淡ゆひ。変ずしして在しまさねば。初て心安堵しなさ。左子の傍ニ進ず。倚て。夢見し。客を遺もなく。告まつ〳〵つ。膝を拭めて遠夢ハ若左子の出家しなん。陽ニやと。思ひ侍りて。稟をあそ。左子ハ心ニ驚きぬつどさくれ。客ニ顧りなひて。舒ニ渝しなん。夢ハ睡の想ニして。晝の妄念邪想の事の。睡の中ニ現ぬまでも。面変形のあるりのあくねば。吉凶も何らあらん。五夢六夢ハ分てども。畢竟五脱の疲労なまば。垂念垂疑ニ夢ハあし。阿娘既ニ此程ハ月水

を見さるゝ事わゝぞや。身重き故に勝劣を。兎ゞ事を念ふゞ故に
仏労をて。斯たるの夢とし。も見つるゝ。自然も思惟なく。月
猶天にあり。歯も落ぢ。臂も復失ざるゝ。況や抑兎に二妃の色
こも。阿娑に倍を者わゝも覚えぢ。是に過去より二世を落ぶ
深き縁に有るをばゝ。故に種さく宿しぬをども。年月時日を
考るに。胎内の子怨ゝくに。尋常に異りて。六年過ねばけるこそ
らぢ。緯の周に後にこそ。自然知りわゝめ。命をば異常を他怪
しむこも。自に疑の心を起しぬひぢ。兎に深に思ねゝし。最
懇切に示しぬふ。おん教徐の有難さに。耶輸陀羅女に傾ぢと
感涙に袖を湿しつ。斯まで太子の愛を蒙る。妾に伊美に果
敢なく。夢の疑猶解て。歓喜の間玉簾筍両個の中に
明しぬれば。出塵の所念を。量難てぞ心中に有る毫も曇せざ

又し程に。當日に故なく過しつ。翌る夜太子に耶輸陀羅女
と。寝殿に入ぬひしぶ。丑三刻の左側に。何処ともなく妙なる
音ふて。今に正しく出家の時なり。門外の防衛厳しくこも。
方便をもて太子の出るを。宮更ども不知ゝセドと。厳に警て
閑内をぞ。當下耶輸陀羅女を南宮中の女官宿直の者
士まで。風熟睡して聞知る者なく。太子に不のゝ聞えぬをば。
是時と笑ぢ。太子に今衣を捧げて。起出ぬひつ傍なる。
耶輸陀羅女を見ぬふ。平生に似やゝを脱しぬ如く。熟睡をし
うる宮体に出家学道を擁護しぬ。諸天の神力ぞ。
竊に脱びぬひつ。後の記念とや思しけん。清身の衣を耶輸陀羅
女の臥うる上に被ぬひ。躰て翠帳を出ぬひて。高々の扉を開き
潜び出させぬひつ。諸所々に集居する。當番の女官も神所

ざるゝ。皆いぎたなく眠て臥しを。彼此顧のふ〻。孰か美人あるゝぬ
へ垂けをど。ゑゝぬ白ひも附のあるを。膏血を裹こし
皮囊。臭き膿を猶も亦。熟と觀じのふ〻。肉中の百節は。完
も芭蕉の破しが似く。九孔（西眼鼻耳口陰門肛門以上九つをいふ）最も汚穢しくて。
愛をづくも有ざるを。頻ふ嘆息しをひつゝ。辛くして窓や
うふ。宮外まで出かひぬ。浩る車も有べしと。淨飯王は豫て
より。宮中の廉を悉く。開く時は轔る音の中外へ響たゝ
ふ。莫り置せなひしうども。當夜ふ限りて此の音もせざるを
不測あるゝ。怪て左子は廐ふ近り。馬人車匿を喚ぶへば。車
匿は寐耳ふ驚る起て。左子を見奉て平身低頭と。恭く
犍陟を前ふ牽て來よと。命ふ車匿は猶預き左子の命ふ
隨つば。嚴しく勅命を奈何ふせんと身は戰慄きて心ひとりふ

猶豫しが。日比の嚴命當時ありと。頻ふ聲をあり立てぞる後の
武士們を喚ぶまども。是亦諸天の神力ふて昏睡て知る者
あしたる子は大く焦燥ひ。九一切衆生の苦ふ煩惱の猪賊
を降伏せまく欲まる故ふ。九ゞ馬を牽とりふを。猶いとやと責
ぬへば。今は車匿も已事を得ず。犍陟を曳出もふ。左子は玉
宮初〻うふ勅子を拿つゝ。跨ぬへば眼ふは敢て見へねども。諸天
義神來降して。馬の前後ふ隨從ひ。波四十里外ふ響るゝ。
北門の鐵扉を開けど。些の音もせず。早宮外へ出ひしを數千
の監率在ふゞ。神力ふ眠せまて。知る者更ふ無りけり。當下
左子は城外へ。障りふく出ひしを。深く歡喜ひつゝ。車匿を顧
まして早めて年月經も別ひし。金剛王樹をうち捨ぬひ。
恐愛の父母妻妾をうつり見も去ぬを。只顧ふ檀特山の路を

檀特山ハ北天竺健陀羅国ニアリ賢ハ佛滅百年後當国ノ太子蘇達拏ガ捨隠ヒシ遺跡也今ニ其太子坐禅ノ石室アリ故ニ後世悉多太子坐禅及成道ノ処ト誤傳ヘシ也今

望ミて逝ぬ。是や只一切衆生の煩悩を救ひとり極楽浄土へ引接んとの大願願より一身の苦行を厭ひ給ふ清公こそ有難けれ

十九 太子一夜ハ檀特山へ独ぬ并車匿との別を惜む

太子の真實慈心を諸天感應まして神通力を添給へ。るも車匿も我ゆゑ路を辿る思ひあて夜道あまたも迷方ハ遂えず。雲を踏虎を分つ。早東雲ハあらはる頃ハ。嶽千里をや紙来ハらん。一座の高山ハ着し時遠処まで隨従ひ給ひし。諸天神ハ感ぜぬくば。太子ハ為ひて遠道を眺望ぬハ。眼別ぬ弃樹葬義して香風異草を。吹薫ら。霧千仞の溪を埋て。雲萬丈の嶺を裹む。寞ハ寂莫。無人の場ぞ。傷ハ立てる自然石ありて。その面ハ。鑿彫しゝる蝌蚪の篆文ありとも苔蒸て。解つべうも無ゝ。

垂ゝ。太子ハ為ひて。熟と爾を。猶檀特山と淩ぬ。悲びぬ。と限りなく。ゝより閃曜と下りぬ。猶も熟質ぬハ。下ハ退凡と紀しゝ。原来遠処こそ音ハ聞檀特山ふぬ。ゝぬと。絶頂遥ハ瞻望ぬくば。白雲周り金光曜き。霊香静ハ吹山下風て。心地清しく。滝ぬふ。遠峯ハ分登らば必ず賢道垂為を修まる。神仙ハ解遁せん。欲。遮莫退凡と在らゝ。塵を離れぬ凡人ハ。遠峯を限りて。登ることを禁めぬひ。退ゝ。ぬふ。ゝ。原来一身生き。菊一身道を求めぬ。何者をか伴ぬ。車匿を。遠処まで来ゝるハ。恨ばゝ。ぬ。海一個鬼ハ隨ひ。ゝゝで。従者を倶ぬ。道ぬ。孫ハ碑面の篆文ハ。退凡と

諸天善神
太子を守護して
檀特山に
追る
車匿
ちやのく

悉多太子

在々所々に凡人に這処より上へ登山を免しぬ者なる。神仙の捉
あり〳〵ん。余をば丸も轉輪王の太子ふして牙貴しとも。汝に人間
の上のことあて。凡躰なる〳〵ぬふ有ねども。丸に菩一心ふ垂上道を求
るあをべ。若神仙ふ遇奉りても。免さるる由あり〳〵ん歟。是もら汁
難なるふ。従者を將て何くんせん。汝に犍陟を牽て都へ還り。父
大王ふ由を奏して。丸須臾山より弥る丸。大恩を捨て出家し。
孝の罪の大ひなると。多年恩愛の深恩を。姨母夫人ふ謝し
奉てよと聞より車匿に驚き悲しく。浩る深山へ太子を捨て。
那都へ還らるべ丸。猶何処までも供奉せでやと泣引ば犍陟も。
を君の別とりふけん。膝を屈めて足を抵りて。頻ふ涙を流せ
ふぞ。太子に玉のあん覚めて。るの額を撫なひ。誠ふ難き千里の
嶮岨を。触も丸を奉て来し。這切に何をかて。今に賞し得さまべ丸。

丸成道して畜生道を脱らまべーと。諭しぬひつ。車匿ふ對
ひぬひ。汝別を恐めども。人に咸獨生て獨死ぬるが世の法なり
會者に定めて離る。丸が母公舞後七日ふして。薨ぬひしを
思ふまでや。一世の母子に離別あり。況て二世の父従なるを。死
別も生別も異なる〳〵。大く別を悲しむとて。丸に菩老病
死の。二の畏を悲しむ故ふ。斯に出家なるる。若世の人ふ
病患無く。不老不死して親子夫婦を従別ること無べ
丸歟。汝に人せぬぞ。余をば二大事の苦しきを。脱んふ垂
上道を求る丸ふ猶離を。隨に人に忠義ふ。丸が
大願を妨る。悪魔波旬の所為ふして。是修道の怨敵なり
這理を暁て丸が與ふ。父大王姨母夫人ふ。丸が登山の由を奏
しく。汝身を安め奉りてよと。余ふ車匿に猶悲しく。つ〻精

紅ゐども今更ふ。左子を遠処へ捨まつりて。獨都へ還り給べ
已が罪宿を雖うゐんと思ひ雖て村胆の心ひとつふ暦く
も。答奉る言葉なく。只黙然と返侍るを。左子ハ猶も餘
しぬ。浩る拙しも未聞薩ふ。唆しつゝ寂然と涙をあるも
何者ぞと。其方を伝と見なふ。遠靈山ふて遇んゝ思ひも
うけぬ獵師なり。なふハ弓箭を執つも。其軀ふハ袈裟濃色
の衣を着うるハ故こそ有めと思ゝふん坐を端しぬひ除る
ふ此方へ歩行来る。伴の獵師ふ對ひぬひ。動静を問成ぬひ
けり

二十 天資を蒙りて左子法衣を得ふ并修論道の權興

當下伴の獵師へ行逝つ左子ふ對ひて恭しく舒るゐう。那
樹蔭ふてゐんを渡の。ふん赤心を承りて。寛ふ感佩仕りぬ。然

て最皇くも。玉形宮を盗しまつるふ。君ハ轉輪王のゐん血統を。
迦毘羅衛国浄飯王の。左子ふこそ在ま〳〵ぬ有ゞさ御意ふ
も。垂上菩提の道をしも。求めぬゐんと思し。只遠く遠靈山へ
登りのふ御發心ハ。ふん健氣ふいへ〳〵も。ふ可しゝ。ゐが歳の若
さゝ。疑ひ奉る事のハ。恐くも問奉らん。什麼垂上正覚の。
霊場ふ到る事。雖ゝ〳〵も易ゝ〳〵も。只汚穢凡躰を厭ふ
のゝと傳へ承りぬ。然るふ君の戴ゐふ。玉冠ハ是何ぞ。
遣らせぬひゆゝと。問奉るを聞し。只て左子ハ怪しゝ。ゐ賤の雄と
思し。只ふひつ。是七寶の冠なり。と宣ふを承りて。獵師ふ乖
雖ゝ〳〵く。夫七寶ふ位ありて。珍〳〵ふ貴むハ人界の制度
ふして。垂上道ふハ上魂の如しと承りぬひぬ。況て人力殷勤
して。造り荘厳しハ御瓔珞まで。汚穢の身ふひえもやと驚も

あく諸奉をハ。たゝ子ハ實のと思しめひ。費心して猶もまゝ衣
冠莊嚴ふ身を纏ひしハ。九重さ深てゝ。寶ひつゝ淨をづゝ
玉冠を脱ぬひ。佩ぬふ寶劍と。瓔珞とも引解ぬひつ車遥ふ
示しぬふ。爲ぬ。宮僅九が言しこゝを心得ゝゝバ委る事ぬり
遠三品を拿歸りて。冠を父大王ふ獻じ。劍を姨母夫人ふ獻
て。九が出家ハ先妣の菩提の爲と一切衆生が生老病死の
苦を救ん。大願ふ成ぬ。ハ。宵させぬつゝ謝し奉る。ふ遠瓔
珞ハ。耶輸陀羅女ふ與へて。九が支ハ念とせそ。父王姨母夫人へ
恭行ふ。徒へ奉をと傳ふべし。勢々遺托を違ひるせそと三
品を車遥ふ載しぬつバ。車遥ハ扒と路上ふ泣伏て云も
幾と。這者体を獵師ハ見奉りて在けるが。ふ左ふ右ふ
對ひて恭問ひ奉る事ぬそ。玉冠寶劍ふん瓔珞ハふん舊

鄉へ遣ふ。ども。ふん衣服を見奉る。數萬の蠶を養數しふ
其糸をもて織成しぬる衣ふてハゆえさや。然をバ綾錦の麗
しぬふ人間の遥ふて。是や五戒中ふ抓くゝぬ。殺生戒ふこそて
いたゝ。彩る正淨衣とふん身ふ纏ひて。無上道へ近りぬふん
と。然しぬふハ。ぬくも。事可笑くゆふと。再び結る言の葉の
凡ふゝざをバ惡多たふハ。心ふ深く驚きぬひ。思こそもふん
藤を。自己攝と打ぬひて。細覺ぬしゝ身躰の凡塵さく去
中ゝぬふ。淨かゝぬ殺生衣を。捨得ざりゝ。紙まさよ海ハ九が
法道の導者ふこそと宜ひ。玉の帶を解ぬひふん衣裳を
惡く脱ぬんと爲ぬふ。ゝ何を。ゝ爾ふ。ゝぬも。無く。皆
脱去バ。裸ふて。露霜凌ぐ單ぞふ。身ふ着る衣も無ゝ。如何ハ
せんと思しゝたゞ。化と心づ化ぬひ。獵師ふ對ひぬひ。九數生

衣ふ心づくで。思えども霊場を。獵して罪を得べくもなく。海ふ
問えを。今更ふ。ものの問何とせん。別ふ第づ死衣服も無し。
見るふ汝が身ふ苦しん。裘濃藍色の衣ふん。井を色ふ与
ぎや。承然バ色が這衣服ハ海ふ領せん。茶何そと宣つべ
獵師ハ笑つ。領きて。おん望ふいえ。悪ふ。ぐ。熟ぐべし。ちふの
御衣を。揚ても。ふ可第用ぐくも有ねば。井ハ脚くも稼ひ
まつらん。備ふ可が清浄衣を。奉るくも是のくふて。仙崖まで
登雑りん。ロ碑ふ聞傳つりふ。退凡の這処より。絶頂まで往時
より。人迹絶て。路も無く。嶮ふる。路魅縄。ふ色ぐ苔最滑
らふて。足踏雑る。嶮岨のくん。樹ふ蔭て。邪魅竜ふ。嶂
氣充満して。肌膚を傷ふ。ハ。縁是を防ぐ。准備垂くして。
一歩も找く雑しとて。純て奉る二品ふ。廻遠弓茶ふ。抑

這弓茶の徳さるや。禽獣の毒を断。遠獵の具ふ。ぐ。乎怨
敵も有ざまバ。是を防ぐの備ふ。ぐ。只沉湖上の一切衆生
貴賤とふく賢愚とふく。各々欲ぐる道ふ辟して。月を集せ
心の鬼を。普く退治降伏。倣し。慈弓悲茶ふて。ゆくバ這弓を
弛し。枉を矯て。おん杖と成しふ。雖所をしも。諭ふ。おん便
ふハ。究竟ふ。茶の羽ハ則ち。写塗ふり。疫と。晝の際間ふ
して。羽の方ふ。ぐと。雖の圓ふハ。陰陽合躰。天然ふ。邪鬼を排
功徳ふ。是を。御頭上ふ。掛ふて。嶂氣を。避も。ふ。ふ。
仙境まで。迎りふ。途中も。賞東ふし。先将と。言ふ。仲の
弓の弦を。弛し。曲て。矯て。茶を。添つ。其身ふ。苦ふる。裘濃深
色の衣を。脱よと。見る。眼。蓋。明く。金色の光を。放ちて。方便まで
在し。獵師の。姿ハ。消て。誕もふく。香氣。馥郁と。薫り。是ふん

太子
單
法臺ホ
分入
車匿
太子

淨居天太子の與ふ示獵師と化しなひ。遠処へ来降して法
衣を授なひしなり。當下太子い遠景勢ふ隨喜の涙を流
しなひ。諸天尤が慶心を懈こなふと斯のごとし。噫有がた
や尊とやと。淨居天が服去なひし。法衣を両手ふ捧なひ。
天ふ向ひて数回おし戴たなひつ。躰て錦繡の袈裟を脱
て。見るも妬嫌く最緩うき。獵師が纏ひし麻衣と。忽更
なひて袈裟へ。爲警の策を施なひ。弓の杖を突立なひつ。
郷ふ車蓋を見うなひ。海も聽り見も走うくん。彩まで天
資神助を蒙る。尤がうへハ念とせで。鄙ふ令ど去遺物の数品。
ちうびふ方僅ふ脱捨し。衣服も咸倉歸りて。鹿野瞿陀弥ふ
分ちちつよ。回をぐくきも父大王姨母夫人ふ示恭の罪を紛し
奉まと宣ひて暮見うも尚なを。慈弓の杖を突立なひ。袈

洗ふ嶮岩を踏分なひつ亭々うる。危巓を投て登りなひ。嗚呼
労をし哉眺夜まで。数萬の宮女ふ冊を。羅綾ふ纏たるを
なひつ。荒き風ふも吹きなひ。貴きん身ふ在せども世の諸人
ぐ煩悩の苦しをを救えんと思し呂を。袈裟なひて。人逆絶し深山路を心剛く
截石荊藤ふ刺を。なひて。雪より清き玉足も。血ふ染なひ。袈裟を
ちうる。分をび遠ん形容を後世　皇国ふ敬ふりの修験者とりひ。
山伏という　山伏の名ハ。もくて山居の僧の様く多くて山伏とのこと。ハ修験道の業ふ
遠道　皇国ふ興ふ。彼の行者を徴うて。抑行者ハ其初が義
小角と異ふ。文武帝のん時ふ和州葛木ふ生し人ちり。
三十二の歳出家して。藤葛を以て衣う。松菓を食ひ石蕩を飲て。
大峯葛藤を經歴して。雅行苦行を重ねて。猶懲界の塵を

濯ひ。孔雀明王の咒法を修して。異類の魔鄙を繼得し。鬼神を駆使して自在なりしが。竟に真止住處を知らず。真居行菊の迹を慕ふて苦行する者無し。

聖宝僧正。役君の遺法を興して。嶮岨の徑を經歷し。苦行の者相繼で。今に至りて絶ること無く。天台真言の両宗あて春秋両度の峯入あり。春は（頂の峯入）聖護院御門室之を行ふ。秋は（峯入）三宮院御門室之を行ふ。當山と云ふ。熊野山伏に當山本山の汎あるは。両寺の配下にあるなり

二十一　官兵四道に分て右子を追ふ并車匿遺物を歌ぐ

爰人車匿は自前獵師の金色の佛躰と変じ志斉特に繫きて懈怠して離るゝ〻右子が杖に携ひて。雖路を辛く辿り。後影を遥に拱きて。空しく見送り奉る。傷に嚮より隣を慮し。

健陳は主の別を惜みて頻に嘶けば。車匿は伝と心づき那此の馬を牽て。獨歸国せるべき。借使然獻障得よと。右子の御怒を蒙るとも。御登山を留めでやんと。倘高くは登り給ふ。右子のあん後影見へざるまで。追止め奉らんと。身を起せども。奈何せん。彼退凡と眺め微しき。碑より峯の方へは一歩も行こと能はざる。強て登らまく欲すれば。全身麻痺して動もなし。車匿は頻に聲ふり絞りて。一霧時後せぬ〻やと思ひ叫ぶ。已が聲の微迦しに。怨怨と霧を覆ひて。右子の御姿を。あひぬ。這光景に驚き柔を。車匿は尻居に撞と座し。聲を限りに泣叫び。今更に郷愛に我と心を。轉して泣くも御遺物を馬の後鞍に結付て。は綱金つ曳立まば主に別る悲に。憑ぎやありけん健陳は。倍涙を流すぞ獣類なれ斯のごとく。

車匿は頻に感慨して、泉涌くと涙臥しぐ。果して亀はまべ氣を
励ます。王子死なんとかあく。牽立つも幾回か。返り深山の巓を打
眺望ても白波の。餘波おもうの沸命を傳養し奉りて在も
身の罪は。術し奉らんと尋念を決め。慈悲として山又山を賞東
あくも下り行心の中で哀をあく。案下絵題再生迦毘羅城あく
三時殿あは。彼朝方子の在しまさねば瞿陀羅。耶輸陀羅。鹿野の
三妃其它數萬の綵女童女。宿直の武士們も大ひに驚き。郭と
爲將軍に告げまべ。爲將軍は狂氣の如く。殿中を徘徊て。四門
の監軍守護の武士を。咸悉く撿しつるに。車匿と犍渉路ざるに
で。原来夜更ふる上ゆて。潛びまさをひしあくんと由を淨飯王に
奏聞し。憍曇跡夫人告まつまべ王も夫人も若こだろに茶後に賞に
泣ぬ。泣くし。狂に大臣。月卿雲客返さに。聞傳へて悉内

とる者。絡繹として引もきくまで。迦毘羅城中の騒動は。宛も昼門
の沸ごく。上を下へと反しけり。徒て有べき時あくまでく。淨飯
王は方絶と。膚慮を勵まし王へども。尚もん涙は乾きも中くまで。
御袖に抑ゆひつ。二新宮を微ぬひて。左子を家の心わるは。誠て
より知る故に。嬰女兒童に至まで。門命して。護しまを。緯の
茲に遠びしは。是阿娘們が怠慢あくまでやと。沼に二新宮は。恐入
てで專猶。涙に袖を絞りつつ。回奏奉る詞を知くまで。胸中耶輸
陀羅女は其夜左に冊きて寢殿に卧まべ。罪一身に窮まて
術し奉る由も無し。浩まべ寂直の嫁女童女。扈從青侍は烏陀
夷をちぐめ。熟睡して知る者無く。外吏們も爲將軍父嚴しく
鞫問しつまべども。此彼一般熟睡しふけん。曾て夢にも知くざる
のこと。四門ともに獄しく。貫に外ざまは。籠地を隔ぬとも。

石垣うるく堅廣くて。出入ふべくも有まを。若地を潛りなひしゝ。弓
の翼を借なひしゝと思ひ雖つも守備の者の過ぐるぎる事を
得さきバ。只出うゝ如何ある嚴神ふ行はせなくも。彼を慢く奉
らじと異口同音ふ陳ずる旨を。澤源王殿聞しなひ。守護の武士
ども。彼のごし。況ていひ甲斐なき女童。二新宮の急慢ハ。罪の海深ふ
及ぶべうゝまを。魯西審ハ四門も用うで。奈何して潛出けん是將出家
学道を擁護まゝ。神所為歟。思議まくうゝぬ事あゝ。這ま
捐も措べきや。昨夜のこふ有ゝまバ。遠くハ行べうゝまを四方へ
追人を投向よと。沼命を下しなくハ。猶召奉りて二十萬の兵を
促し四道ふ配分て。ゝ子を追抑奉らんと。汗馬ふ鞭を當も無き
ゝ。往方を尋まのゝまを。思劇いふべうも無うりうり。斯て東の方を投
て。発向しぬる一隊の兵ゝ。速くも翌日車匿と犍陟を伴ひ帰り
来ふけまへ。階下ふ引居て。寫將軍聲荒暴ふやを車匿臆
たくも。嚴令を蔑如ふして。夜更ふ何因ゝ備の君の御使をして
今更ふ阿容々々一個帰来ゝる。敏稟さまどやと責問ゝまして。車
匿ハ怨恨首を擡。再昨の真夜中ふ。ゝ子ふふ就ざまを奉ゝよゝ
衛士監率を喚ども起ず。心ゝ有ゝ御寮馬を牽ふしまいゝ。
ゝ子ふ北門自然開きしゝより。夢ゝ現の境を分ざまを投て。往方ハ知ゝ
ねども。只犍陟の襟を拿つ。只顧走て曉ふハ豈計らんや千里外
の。檀特山の尾上ふ来ゝる。澤の石間ハ是のこをゝ。其特下宮
流と共ふ。御出家の御心を。頻ふ留奉りしが。人間ふ老病死の
二六事。無くハ幾心せじと。宜ふ折しも樹間より。現を出し獵師が
神変奇特の為体。箇樣々々と審ふ紓て。恭ふ奈菓を勢ひ勢ひ
如くふて已夜を得ぎゝ。ゝ子を別奉りて。檀特山を下りし

時八時昔の朝ふゆひーと甚黄昏ふ既ふして千涂里を除来ふ
けん當国迫くありける折しも遠人の無るふ行會しよう云へ
僅の行程を昨夜より歩行つめて呂今帰家仕りね再昨の夜うう
して往還二十六百里を鬼も角も歩行ふふ常一食ぐらふ仕
ねど絶食歩くもいと疲是彼を思ひ合せば右二四を送ひしも下
宮の速く帰りしも感是諸天の威神力以て計しふふ乳寄き
乗ふいふと有し容を遺ちく速つ所遺物の数品を捧まんうて
御遺言を如此々々と傳へ奉えば階ふ羅列ふる辯慶を見
合して軍伝軍凝せぐるも垂く爲将軍さへ甚虚實を量兼
てで黙しりる

八宗起原釋迦實録巻之三畢

東京